

滑稽俳句修業 (二)

東 良子

拙句を例にあげて「滑稽俳句の方法」を「おさらい」しています。前回は、「擬人化」「正直な心」「滑稽目線で捉える」「反対側から見る」などを滑稽の方法としてあげました。今回も滑稽を拓く扉としてまとめてみたいと思います。

◆言葉遊びを出発点とするが「第六の扉」

八木健滑稽俳句協会会長の滑稽は「言葉遊び」に原点があるように思います。八木健会長の地口、いわゆる駄洒落の句は半端ではない。最右翼は「蟬殻を脱ぎつつあればセミヌード」でしょう。「なつかしのお味噌が届く年の暮」が考え落ちの最高位でしょう。「風の兄弟長男が春一番」なども言葉遊びの句としてよろしいか。私めの句です。

本の虫紙魚に上座を奪はるる

良子

「本の虫」は人間です。読書好きを言います。紙魚も本の虫ですが、本を食べてしまいますね。人間がいくら本好きだとしても食べたり出来ませんから、人間の本の虫は紙魚には敵わない。という意味です。読もうと思っていたら食べられてしまった。ということもあるわけです。取り合せる言葉の意味の違いから「滑稽」を見つけることが出来れば滑稽句につながるように思います。

伝統の団扇をめぐり内輪揉め

良子

団扇と内輪で洒落たものです。私の心の根底に「駄洒落は低俗にあらず」があります。駄洒落が滑稽の出発点です。駄洒落と思っても作っているうちに滑稽の味が深まってゆくように思います。この句の場合、「伝統の」を思いついた時に句に大きな意味を持たせることができました。

◆滑稽の原点は意外性が「第七の扉」

八木会長の句に「大男コガタアカイエカに悩む」があります。「大きな男」と小さな「蚊」の取り合わせも可笑しいものですが、大男が「悩む」という意外性に滑稽があると思います。ただし、その滑稽の取り合わせは「思いつきではなく現実に起きた出来ごとのようなリアティーをもって迫ってきます。意外性は生活の中に題材を見つけてこそで、説得力を持つように思います。

芋版に彫りし猪食べにけり

良子

この句は私の子どもの頃の体験を書いたものです。猪の干支で年賀状に「芋版」をつくり、猪を彫って使用した後でその猪を食べてしまったのです。畑の芋を食べた猪を芋版にして食べてしまったことに、仇(あだ)打ちの可笑しさもありました。当事者としては結構面白い印象に残る出来事でした。小論は「滑稽は意外性」ですが、その意外性は、

生活の中に見つけることが無理のない滑稽句を生むと思います。

◆誇張することが「第八の扉」

一軒家なり凧に包囲され

良子

この句は凧の吹く夜の寂しさを詠んだものですが、「包囲され」は、その時の孤独感との戦いです。「一軒家」「包囲」が誇張です。一軒家と言えば「ポツン」とある風景です。実際はそんなことはありませんが、平原にある一軒家のように感じたのでした。凧も東西南北から攻めてくるようでした。このように「感じたまんま」を書くと「誇張すること」になるようです。

八木会長の「滑稽俳句についての講演」をお聴きしたことがあります。心に残っていることの一つに、「誇張は決して大袈裟に言うことではなく、感じたまます素直に書けば誇張になる」ということでした。それが今になってわかるのです。